

# いつも点火されている私

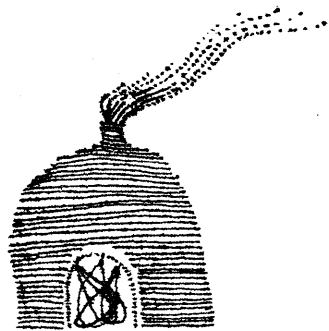
## ——二つの話——

バザーも終了に近づき、最後の熱気が盛り上っています。私はひと時の休息を勧められて、職員室の椅子に腰を下しました。

園庭の売店は、ポツポツ片付け始めています。私も、自分の心にホッと一息入れ、騒音の中のひとりを楽しんでいました。

そんな時、卒園児S（小三・男児）が、にこにここと私

## 赤羽 美代子



の前に立ちました。私「あら、Sちゃん、今、来たの？」S「うん」（Sは、数年前に本誌に記した、双子の兄弟です。園児時代、短気で、些細な事で泣き喚ぎ、手当たり次第に物は投げ、兄弟揃って、ちよつとした有名人でした）その、Sの腫がふと曇りました。S「先生、お腹空いたの？」と、私の顔を心配そうに覗き込みます。私は急に空腹を意識しました。私「そう、お腹空

いたわ」S「朝から食べていないの？」そう云えば、早朝から、食事らしい食物が胃袋の中に存在していない事が、いよいよ実感として、脳裏に伝わってきました。私「そっだ、食べていなかった」S「先生、お金、持っていないの？」私は、夢の時間帯の中にあるような、云い知れぬ気分になりました。だって、思う存分に、自己中心の世界を作り、園生活を過ごしたSが、今、自分以外の人を、本気で心配しているなんて。

私は、Sに思いきり甘えてみようと思いました。私「今、お金、持っていないのよ」S「200円あると、ホット・ドッグが買えるんだよ。僕、先生に買って上げるよ。」私「Sちゃんが買ってくれるの？」S「うん」Sは、ゴングとポケットに手を入れて財布を取り出し、中を覗いています。私も横目でSの財布の中を、そっと覗きました。100円玉が2個、入っていました。Sはその200円を取り出し「先生、無駄使いをしてはいけないよ」と、私の掌に乗せてくれるのです。Sの母がそう云ってSに渡しのお金でしょうか？。私「Sちゃん有り難う」S「僕

が、ホット・ドッグ買ってきて上げようか？」私「ハイ」Sは園庭のホット・ドッグの売店に駆けて行きました。既に片付け始めている売店の前に立ち、何やら一生懸命に交渉しているSの姿に、時の立つのも忘れて、見とれていました。

やがてSは嬉しくてたまらない表情で、出来たてのホット・ドッグを両手に乗せ、前屈みに駆け戻って来ました。S「先生、早く食べなさい」私「ハイ、ハイ」Sは、にこにここと、じーっと私の口元を見つめています。私「H先生、Sちゃんが買って下さったのよ。半分ずつ戴きましようよ」H先生と私は、半分ずつのホット・ドッグを口にしながら、今後、一生、私のお腹は渴きを知らないのだと思いました。私、H先生「うわー、美味しい、美味しい。Sちゃん、有り難う」Sは、恥ずかしくて、嬉しくて、顔いっぱい、レモンのように爽やかな笑顔です。

そして、Sの財布は空っぽになりました。でも、私は、その後もSに200円を返す事は止めました。Sの無償

の愛の喜びを壊したくなかったからです。私・H先生・Sの心も、何か艶やかさと、豊かさと、喜びの心とが、共に無限の空間に拡散し、美しい音楽の調べとなって流れた気分でした。こうして、明日へ向かつての情熱に火が点火されました。

老母が突然の病気で入院をしました。入院中、母は余り食事が進みません。

そんな時、卒園児の母のNさんは、一カ月入院の間、毎日、手作りの食事を運んで下さいました。野菜、魚、肉類をすり身にし、雛鳥を養う親鳥のような食事には、ただただ、頭が下がりました。病室の御老人方は、心淋しい方が多く、Nさん手作りの差し入れを、涙を流して共に食して下さい、又、私の毎夕のお弁当もNさんと幼稚園の先生方の手作りのお弁当と聞いて、御老人方の、暗くなりがちな気分も、徐々に溶けていくようでした。

その底力に支えられた私は、昼は幼稚園、夕は老稚園の先生として、ボウボウと山火事のように燃えました。一人の生命の火を点すのに、こんなにも多くの愛の火が燃やされるものなのですね。老母は元気になりました。神様は私を、燃えるゴミとして分類されたのだと思います。神様により点火された火を、幼児へ、隣人へと点火していく者でありたいと願っているのですが、寄る年波か、確りと燃えずに、もくもくと煙りばかりが立ち登る此の頃です。

(霊南坂幼稚園)

